

# 『International Economyと Global Economy』

経済学部長 利光 強

TPP 交渉は 2013 年末までの妥結を目指して努力していたようですが、結局、継続となりました。やはり各国の思惑（国益）が交錯し、とりわけ日米間のすり合わせがうまくいかなかったのかもしれない。

多少乱暴かもしれませんが、TPP とは、いわば財・サービスの貿易、投資、保険制度、雇用のルールなどに関する統一基準を参加加盟国間において確立することと理解できます。確かに、国々の間で様々な基準やルールが錯綜していれば、効率性が良いとはいえません。その意味では、統一基準ができることは経済的にはメリットがあるのかもしれませんが。しかし、情報通信技術の発達した現代の市場経済においては、世界規模での統一基準を獲得した国や企業が莫大な利益を得る可能性が非常に高くなっています。例えば、OS に関しては Windows の独占的な状態ですし、また、携帯電話市場では iPhone (iOS) と smartphone (Android) との間で基準獲得競争が行われています。つまり、こうしたネットワーク市場では、競争の結果、勝者による一人勝ち (A winner takes all) になる傾向があります。まさに、「弱肉強食」の状態となるわけです。弱いものや少数が消滅し、強いものや多数が生き残る。市場経済の論理が地球規模で人々の暮らしのなかに浸透してきています。

言語についても同じようなことがいえます。英語はまさに事実上、グローバル・スタンダード（世界言語）となってきています。世界経済の GDP の 25 パーセントほどを英語圏が占めているというデータもあります（話者の数では、圧倒的に中国語が多いのですが…）。もちろん、世界中の人々が英語を話すことができれば、すべての人がうまくコミュニケーションを図ることができるかもしれませんが。そのことでビジネスがスムーズに進められるかもしれませんが。しかしその一方で、経済にとどまらず、多様な国民や民族の思想や文化などが、徐々に「英語文化」化（アメリカナイズ?）されていく「危険性」もあるかもしれません。同一基準、同一ルール、同一嗜好、同一思考、同一言語、同一文化、…。大げさかもしれませんが、同質で平板な社会になりつつあるようにも思えます。しかし、その同質な社会は、かならずしも平等な社会とはいえない気がします。そうした社会が脆弱であることは、あえて説明しなくても理解してもらえらると思います。

ところで、自然は決して同一、同質ではありません。同じ種でも多様性に満ちています。これは、自然が生命に保険をかけている、いわばリスク分散をしていると理解できないでしょうか。多様性には不確実性への強さが内包されていると思います。ある選択肢がだめでも、別の選択肢で生きていくことができる。

一つの考えだけに従って全員が同一方向に進んでいく、全体主義の危うさをここであえていう必要はないでしょう。先ほどの言語や OS に関連していえば、例えば、SF ではありませんが、何らかの影響で世界の人々が英語を理



解できなくなってしまうたら、また、唯一の OS が非常に強力なウイルスに汚染されてしまったら、全世界の人々の暮らしは大混乱をきたすことになります。

私の専門分野に関連していうと、International Economy と Global Economy のちがいに気をつけてもらいたいと思います。前者は多様な国民（あるいは、国家）を前提としたなかでの経済・金融取引を意味しますが、後者は統一的な、あるいは全体的な地球規模の経済・金融取引を意味するものと思います。現在の状況を鑑みるに、グローバルイゼーションの名のもとに後者の方向に進みつつあるのではないかと、思います。

将来、世界言語となった英語 (?) によるビジネス交渉、為替リスクのない地球規模で統一通貨となったドル (?) を用いた金融商品取引や投資活動、統一基準 (アメリカン・スタンダード?) の製品やサービスの市場における熾烈な企業競争、…、そういったことが起こっているのかもしれませんが。そのとき、世界中の人々の暮らしはどうなっているのか、今ここで考えておく必要があるのではないかと、思います。